

2011年1月

【報道関係各位】

〈ポーラ美術館 展覧会案内〉

レオナール・フジタ

Foujita : mon Paris, mon atelier

私のパリ、私のアトリエ



2011年3月19日(土)-9月4日(日)

【報道に関するお問い合わせは】 ポーラ美術館 広報事務局 担当: 増田、小椋、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316
ポーラ美術館 学芸部広報担当: 比良田(ひらた) Tel 0460-84-2111/ Fax 0460-84-3108

開催趣旨

ポーラ美術館では、「レオナルド・フジタ —私のパリ、私のアトリエ」展を開催いたします。

少女や裸婦、猫を描いた画家として親しまれているレオナルド・フジタ(藤田嗣治、1886-1968)は、およそ60年にわたる長い画業のなかで、自画像をはじめとする肖像画や室内画、静物画、子どもを主題とした作品などにも積極的に取り組みました。近年、彼の画家としての活動を紹介する展覧会や評伝の出版などが進み、彼が遺した絵画作品に向き合う機会が増えつつありますが、それとともに従来の画家のイメージを超越する、彼の創作活動の幅広さにも注目が集まるようになりました。フジタの仕事は、油彩画、水彩画の制作以外に、版画、挿絵本の制作や書籍の装丁、室内装飾、木工、写真など多岐にわたり、いずれも彼の豊かな感性と自由な発想にあふれ、作品として高い完成度を誇ります。

ポーラ美術館は、フジタがエコール・ド・パリの画家として活動した1920年代の絵画をはじめ、彼の制作した挿絵本や版画、職人に扮した子どもをユーモラスに描いた晩年のタイル画の連作など、総数66点を収蔵しています。「芸術家(アルティスト)」であるとともに「職人(アルティザン)」であろうとした、フジタの芸術の特色を示すこれらの作品群は、彼の理想とした生活、そして彼が豊かに彩ろうとした日々の暮らしを垣間見せるものです。

本展覧会では、当館のコレクション66点を中心に、フジタの画業をはじめとする、彼の多彩な創作活動の一端をご紹介します。フジタが画家として名声を得、その後の活動の拠点となった芸術の都パリ、そして彼の制作と生活の場であったアトリエに焦点をあてながら、それらが彼の多様な活動にどのような影響を与えたのか、そして彼の芸術がいかに形成されたかを探ります。また、東京文化財研究所、東京藝術大学大学院文化財保存学保存修復油画研究室の協力により実施した光学調査を通して、フジタの技法の秘密に迫ります。

開催概要

【展覧会名称】 レオナルド・フジタ —私のパリ、私のアトリエ

【会期】 2011年3月19日(土)—9月4日(日) 会期中無休

【主催】 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

【協力】 東京文化財研究所、東京藝術大学大学院文化財保存学保存修復油画研究室

【会場】 ポーラ美術館 展示室1 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)
Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108 / HP: <http://www.polamuseum.or.jp>

【作品点数】 約80点

【出品作家】 レオナルド・フジタ(藤田嗣治)、パブロ・ピカソ、アメデオ・モディリアーニ、
キース・ヴァン・ドンゲン、ジュール・パスキン、マリー・ローランサン、キスリング

【開館時間】 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

【入館料】

	個人	団体 (15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引 (65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

【広報用画像①】

レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《姉妹》1950年 油彩/カンヴァス
(c)ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2011

1. 初公開作品11点を含め、 日本最大級のレオナール・フジタコレクション66点を一挙公開！

◆パリへの想い、アトリエでのフジタの手仕事

ポーラ美術館は、フジタがエコール・ド・パリの画家として活動した1920年代の絵画をはじめ、職人に扮した子どもをユーモラスに描いた晩年のタイル画の連作36点など66点を収蔵し、日本最大級のフジタ・コレクションを誇ります。

本展では《たまごを抱く少女》《犬の円舞》などの油彩画や、『魅せられたる河』『海龍』など晩年に取り組んだ挿絵本など、初公開作品11点を含む総数約80点を初めて一堂に展覽します。戦後のフジタがパリへの想いを込めて描いた油彩画や、彼の職人的な気質が表われた手作りの額縁などにも焦点をあてます。

2. 「素晴らしき乳白色」の秘密に迫る！ 最新の光学調査でフジタの戦後作品を分析

◆光学調査で迫る、もうひとつの「白」の秘密

1920年頃のフジタは、同世代のパリの画家たちにみられた、表現主義的な傾向とは異なり、技法材料の研究に裏打ちされた独創的な表現を確立しました。とりわけ「素晴らしき乳白色」と賞讃された独自の表現方法は、洋の東西における伝統的な絵画技法に対する彼の造詣の深さを反映しており、繊細な墨の描線と油絵具の薄塗りによって対象をとらえる、他に類をみない描法を可能にしました。

彼の職人的な制作手法は、近年、保存科学的上の調査手法によって解き明かされつつあります。本展では、過去のフジタ作品に対する技法材料研究をふまえ、あらためて「素晴らしき乳白色」の秘密に迫ります。

3. アトリエのフジタの謎を解く！ 土門拳が捉えたフジタの技法

◆土門拳の写真が解き明かす、「黒」の秘密

フジタ独自の上品な乳白色の下地と、毛髪のようなやわらかな輪郭線。さらにその乳白色を引き立て、画面に統一感をもたらす灰色の暈しほか（淡い陰影の調子）の表現方法など、フジタの技法には未だ解明されていない部分が多く残っています。

第二次大戦中と戦後のフジタをアトリエに訪ね、彼を被写体とした写真を数多くのこした土門拳（1909-1990）は、制作に励むフジタの様子を撮影することができた、数少ない写真家の一人です。彼の写真は、墨と面相筆で繊細な輪郭線を施すフジタの姿とともに、彼の身のまわりに配置されている、描画手法の解明につながる様々な画材、道具類を記録しています。それらを用いていかにフジタが独自の表現をおこなうことができたのかを、本展において考察します。

各章について

◆ 第1章 モンパルナスのフジタ —「素晴らしき乳白色」の誕生

「素晴らしき乳白色」とも呼ばれた技法でパリ画壇の話題をさらい、一躍、「エコール・ド・パリ」の寵児となったレオナルド・フジタ。フランスはもとより世界のフジタとなった1920年代の彼の作品と、フジタの良き仲間、そして良きライバルであったパリの画家たちの絵画を通じて、フジタ芸術がいかに形成されたかを検証します。



レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《自画像》
1929年 水彩、墨、絹本
(c)ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011



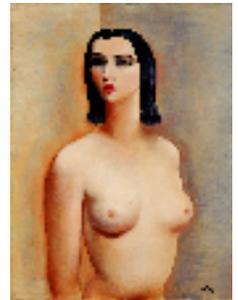
アメデオ・モディリアーニ
《ルネ》
1917年 油彩/カンヴァス



アメデオ・モディリアーニ
《ルネ・ア・チエホフスカの肖像》
1917年 油彩/カンヴァス



ジュール・バスキン
《果物をもつ少女》
1927年 油彩/板



キスリング
《裸婦半身像》
1932年 油彩/カンヴァス
(c)ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011

◆ 第2章 アトリエのフジタ —空想への旅

第二次大戦を契機に、パリから日本へ活動の拠点を移したフジタ。戦争記録画を描いたことから戦後は非難の対象となり、1949年には逃避行しながらニューヨークへ渡ります。

フジタはアトリエにこもり、虚実のはざまに存在するような女性や子どもたちを描いた作品を描き、パリへの想いを込めた品々を手作りしました。そしてパリでの再起を意識し始めたこの頃、フジタは再び「乳白色」の下地に面相筆の墨で輪郭線を描く表現方法で制作するようになったのです。《ラ・フォンテーヌ頌》はニューヨークに渡り、初めて制作した作品です。フランス人が慣れ親しんでいるジャン・ド・ラ・フォンテーヌの寓話集を題材にしたこの作品は、フジタのフランス、パリへの想いが込められているといえます。

本章では、フジタのアトリエでの手仕事、フジタが再起をかけた「乳白色」と墨—「黒」の秘密を、土門拳(写真家・1909-1990)の写真と最新の光学調査による知見からご紹介します。

* コラム

フジタは自信作には制作時間を書きこむことがありました。この作品の裏には「67時間」と書かれています。



【広報用画像②】

レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《ラ・フォンテーヌ頌》 1949年 油彩/カンヴァス
(c)ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011

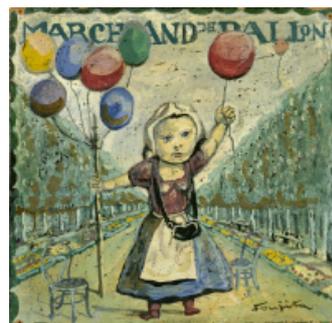
◆ 第3章 小さな職人たち —パリへの讃歌

フジタは1958年から翌年にかけて、子どもの職人尽くしといえる油彩画の連作を制作し、それらをパリのアトリエの壁面一面に飾りました。モティーフとなっているのは、左官や指物師、椅子職人のような手先の技術によって物を製作する人々ばかりでなく、古くからパリの路上でみられた馬車の御者やガラス売りのほか、風船売りなど職種はさまざまです。タイル状のパネルに描かれたそれぞれの油彩画には、フジタ自身の空想が重ねあわされており、彼の子どもを主題とした作品のなかでもひととき異彩を放っています。本展では全36点を一堂に展覧します。



【広報用画像④】

レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《椅子職人》
1959年 油彩/ファイバーボード
(c)ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011



【広報用画像⑤】

レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《風船売り》
1959年頃 油彩/ファイバーボード
(c)ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011

第2章の見どころ① —パリへの想い、アトリエでのフジタの手仕事—

フジタは日本で戦争責任を問われるさなか、「エコール・ド・パリ」時代に脚光を浴びたパリへと想いを馳せました。その想いは、パリでの理想の家をかたどったマケット、そして自ら制作した額縁といった形であらわれています。さらにパリでの再起を意識した頃からは、1930年頃から始めた画面を油彩絵具で覆いつくす表現をやめ、フジタ独特の「素晴らしき乳白色」で再び制作を始めるようになりました。

土門拳は、「君には手法を盗まれる心配がない」と、フジタからアトリエでの撮影を許され、その姿を数多く撮影した写真家です。土門はフジタのパリへの想いをマケットやフジタ自作の額縁を通して写し出しています。また独特の技法の謎を解く鍵をアトリエで制作するフジタの姿の写真を通して与えてくれます。本展ではフジタのさまざまな姿を土門拳の写真図版とともにご紹介いたします。

◆ パリへの想い

フジタは終戦直後の日本にあって、理想の我が家を想像し、そのマケットを手作りしました。このマケットは「私たちの家」と名づけられ、この後フジタと共に海を渡りニューヨークを経てパリへと辿り着きます。このマケットはフジタの創作の源泉となり、《室内》のほか、《ラ・フォンテーヌ嶺》《たまごを持つ少女》(初出品作品)《猫を抱く少女》など、数々の作品の舞台として登場します。



土門拳撮影 フジタとマケット「私たちの家」1947年頃



【広報用画像③】

レオナル・フジタ(藤田嗣治)《室内》1950年 油彩/カンヴァス
(c)ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2011

◆ アトリエでのフジタの手仕事

パリで制作された《姉妹》を飾る八角形の額縁は、もともと内側に鏡が嵌め込まれ、戦時中の日本のアトリエにかけられていました。これは土門拳がアトリエで額縁を制作するフジタを撮影した写真からわかったことです。立てひざをつき、肘を固定して額縁の木地を接着するフジタの姿勢は、本職の額縁職人特有のものであり、額作りにも精通したフジタの職人的な仕事をうかがわせます。この額縁もフジタと共にパリへ渡り、パリでの生活へのオマージュとして描いたと思われる《姉妹》を装飾する額縁として新たな使命を与えられることとなりました。本展では《姉妹》と、《姉妹》の額縁以前の姿を土門拳の写真図版とあわせてご覧いただけます。



【広報用画像①】

レオナル・フジタ(藤田嗣治)《姉妹》1950年 油彩/カンヴァス
(c)ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2011



土門拳撮影 フジタのアトリエ 1942年頃

第2章の見どころ② 光学調査と土門拳の写真から迫る「白」と「黒」の秘密

フジタにとって制作上、技法は命であったといっても過言ではありません。1920年代、同じくパリで活躍していたエコール・ド・パリの画家たちが技法よりも表現を重んじていたのに対し、フジタは技法に作品のアイデンティティを見出します。パリでの成功には日本人であることが武器になると自覚し、面相筆で「墨」の描線を描くこと、「白」と「黒」を中心とした色遣いで描くことを戦略的に選択します。その彼が1930年代、壁画や戦争画に見られるような油絵具で画面を覆いつくす方法で制作する時期を経て、なぜあえて再び「乳白色」で制作するようになったのか—この疑問から当館では戦後のフジタの技法について調査しました。結果エコール・ド・パリ時代とは違う「もうひとつの乳白色」と、フジタ独特のぼかし技法の秘密が明らかになりました。

◇光学調査で迫る、もうひとつの「白」の秘密—再起をかけたフジタの想い

①戦後のフジタ作品数点の下地に白色絵具の「ジンクホワイト」が使われていた。

「乳白色」はカンヴァスに施される地塗り(下地)の色を生かしたものです。下地に使われた絵具の種類を調べることで、1920年代と戦後の作品の技法に相違があるか明らかになると考えました。

【調査前の仮説】もし単純にエコール・ド・パリ時代のように名声を得たい、ということから再び「乳白色」で制作するようになったのであれば、かつてと同じ技法で戦後も描いているのではないかと。

【調査結果について】当館収蔵の戦後のフジタ作品の数点(《姉妹》、《ラ・フォンテーヌ嶺》等)では、「ジンクホワイト(亜鉛華)」が使われていた。これは亀裂が入りやすく下地には使ってはいけないとされている絵具です。一般的に下地には、「シルバーホワイト(鉛白)」が使われ、フジタもエコール・ド・パリ時代この絵具を使っていました。

【結果をうけての仮説】戦中戦後の物資不足の間、シルバーホワイトの供給は僅少でした。しかし、乳白色を表現するために最も必要な白色絵具のない状況でも、乳白色の下地を制作し、原点に還ろうとしたフジタの努力がうかがえます。フジタは簡単に原点に還ったわけではないのです。



蛍光X線調査の様子(ポーラ美術館)

◆土門拳の写真が解いた「黒」の秘密—光学調査では解けなかったこと



土門拳撮影 制作中のフジタ 1942年頃

①戦時中には油絵具に墨をのせるために「シッカロール」を使った

②フジタ作品の特徴のひとつである、ぼかしの技法には木炭の粉が使われていた

土門拳は記録写真で有名ですが、梅原龍三郎や小林古径等画家のアトリエでの姿も多く撮影しています。フジタに関する写真の調査をしていたところ、偶然今回の発見に至りました。

①について

フジタは油絵具による地塗りの上に墨をのせるため、地塗りの表面に「タルク」という物質を施していました。この「タルク」(滑石という白い鉱物の粉)には、油分も水分もよく吸収する性質があります。地塗りの表面に施されたタルクが油絵具の余分な油分を吸収したため、水性の墨が吸着しやすくなったのです。今回、このタルクの正体が「シッカロール」(ベビーパウダーの商品名)であることが戦中の土門拳の写真からわかりました。(写真中央のやや左上にシッカロールの缶が写っています。)身近な生活用品を制作に生かしたフジタの知恵に驚かされます。

②について

【調査前の仮説】

光学調査では物質が含む成分を検出することで、物質の種類を特定することから、成分の似た物質は判別がつかせません。そのため暈しの技法に使用されている黒の材料(例:木炭、鉛筆など)が何であるかわかりませんでした。ただ、本調査の中で行った拡大鏡の調査では、暈しの部分に黒い粒が散見され、この正体に疑問を持っていました。

【調査結果】

左端に缶ケースに入った木炭、写真手前下側に木炭を削った粉が見えます。暈しの技法に使用されていた黒い粒の正体は木炭の粉が使用されていたことがわかりました。

◆参考資料:構造から見るフジタ作品の特徴

・伝統的カンヴァスの断面図(例)
(墨がのらない)

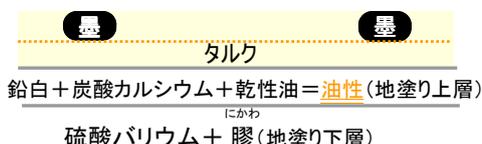


鉛白+乾性油=油性(地塗り上層)

硫酸バリウム+膠(地塗り下層)

麻布

・フジタ作品の断面図(例)
(墨がのる)



鉛白+炭酸カルシウム+乾性油=油性(地塗り上層)

硫酸バリウム+膠(地塗り下層)

麻布

・伝統的な油絵(左例)は、膠を塗り目止めを施した麻布に、白色絵具(鉛白など)と乾性油を混ぜた地塗りを施し描きます。
・フジタは上述のような伝統的な油絵の技法に則り地塗りの上層部分である白色絵具にタルクを施しました。



土門拳撮影 制作中のフジタ 1942年頃

資料 フジタ・技法と制作拠点の変遷の歴史

フジタは長い制作活動の中で幾度となく制作拠点を移し、取材旅行にもしばしばでかけています。制作拠点と表現方法には密接な関わりがありました。

●1920年代～ エコール・ド・パリの画家としてーパリ

・技法…乳白色・墨

・主な展示作品…《自画像》、《五人の裸婦》、《横たわる裸婦と猫》

1919 サロン・ドートヌヌに6点の作品を出品し全点入選。同会員に選ばれ、翌年正式会員として参加。

1920 サロン・ドートヌヌに乳白色の油彩画3点を出品し独自の画風を確立。

1921 サロン・ドートヌヌ絵画部門の審査員に選定される。

1923 サロン・ドートヌヌに《五人の裸婦》を出品。

1925 フランス政府からレジオン・ドヌール(シュヴァリエ)勲章を、ベルギーからはシュヴァリエ・ド・レオポルド一世勲章を受章。

●1930年代～ 放浪の時代ー日本、パリ、南米

・技法…多彩色の油彩画

1931 秋にブラジルへ。リオデジャネイロで個展開催。

1932 メキシコへ行き北川民次と会う。7ヶ月滞在し、リベラ、オロスコの壁画に感銘を受ける。

1933 メキシコからアメリカ西部を経由して日本へ帰国。高田馬場の親戚の家に滞在。

1937 平野政吉邸の土蔵内で《秋田の行事》を制作、麴町区下六番町に転居。

1939 君代夫人とアメリカ経由で渡仏。

●1940年～ 皇国の画家としてー日本

・技法…多彩色の油彩画

・主な展示作品…《植物のなかの裸婦》、《私の夢》、《猫の床屋》

1940 陸軍省の依頼でノモンハンの戦闘画を描くためにソ連、中国国境地方へ。

1941 第2回聖戦美術展に前年のノモンハン取材による《哈爾哈河畔之戦闘》を出品。

1944 戦渦を避け、神奈川県津久井郡に疎開。

1945 戦争美術展に《サイパン島同胞臣節》を出品

1946 アメリカ軍司令部のフランク・シャーマンと親交を結ぶ。

同年、日本美術会が結成され、美術界の戦争責任論議がはじまる。

●1949年～ 日本からアメリカへーアメリカ

・技法…乳白色・墨

・主な展示作品…《ラ・フォンテーヌ嬢》、《美しいスペイン女》

1949 ブルックリン美術館付属美術学校の教授として招かれニューヨークへ向かう。

1950 フランス入国許可があり、ニューヨークからパリへ。

●1950年～ 安住の地を求めてーパリ

・技法…乳白色・墨

・主な展示作品…《姉妹》、《室内》、《校庭》、《誕生日》、《小さな職人たち》

1950 モンパルナスのカンパーニュ・ブルミエール街に居を定める。

1951 挿絵本「魅せられし河」を65歳の誕生日の記念に上梓。

1955 フランス国籍を取得、日本国籍を抹消。日本芸術院会員を辞退。

1957 レジオン・ドヌール(オフィシエ)勲章、受章。

1959 ランスの大聖堂でカトリックの洗礼を受ける。洗礼名「レオナル」。

1965 洗礼式の代父をつとめたルネ・ラルーの後援でランスに礼拝堂を建立する計画に着手、翌年フレスコ画完成。

1968 チューリッ州立病院で死去。